



ち え の わ

Vol. 26

伝説の英雄

会員 福田 伸一

あー、頭が痛い。
昨日、飲みすぎたみたいだ。
とりあえず、メールチェックだけはしないと…

うん？

F 先生

おはようございます。
地元の新聞に「自衛隊に中小企業技術を採用」という記事がのっていました。
民間技術を軍事分野で使う「デュアルユース」の動きらしいです。
これで中小企業の優れた技術が世に認められ、地域を含めた活性化がはかれるとよいですね。
それでは。

後輩の T 弁護士からのメールであった。

そうか、これまであまり注目されていなかったけれど、良い取組かもしれないな。
にしても、頭が痛い。鎮痛剤でも買いに行こうかな…

.....

・・・遠くのほうで声が聞こえる。

「所長、所長、依頼者との打合せ終わりました」

気がついてみると目の前に J 弁護士が立っていた。

「すまん、すまん、どうやら居眠りをしてしまったようだ」

「いえいえ、気にしないで下さい。このところ私が処

理しなければならぬ過払い金返還請求事件が立て込んでいて、所長にも夜遅くまで作業を手伝っていただいていたから、お疲れになったのでしょうか」

「そうかもしれんな。ところで今日の依頼者は君の顧問先の S 工業だったね。どんな案件だった。社長は元気だったか。」

「はい、実は A 国では最近、中小企業活性化や地方創生の名の下で、中小企業が保有する優れた技術を国レベルで共同開発して実用化や製品化する動きが活発になっているようです。社長によれば、このたび、S 工業も保有技術を基に国と共同開発することになり、現在、実用化に向けて検討中とのことでした。で、その保有技術というのがステルス機に応用することで現在のステルス機とは異なった画期的なステルス化をはかることができるものらしいんです。」

「ほう、それはすばらしいじゃないか。うまくいったら、君の顧問料、もう少しアップしてもらえないかね」

「そうですね、そうなるとういのですが。実は、所長もご存知のように S 工業は小さな会社ですので、技術上の秘密等を管理する体制が整っていないんです。軍事に関連する技術ですので、秘密漏洩してしまうとしゃれになりません。そのため、管理体制を早急に整備しなければ、この話はなかったことになってしまうらしく、社長も困っていました。せっかく、ここまできたのに頓挫させるわけにはいかないって。」

「ということは、その管理体制を君が構築することかね。」

「そうなんです。この手の案件は未経験ですが、頑

張ってみます。それと、この案件は国のプロジェクトに関する事なので、相応の予算がついているらしく、こちらの報酬も結構よいものになりそうです。これまで、私が依頼されてくるのは市中の小さな仕事ばかりで所長には売上面で迷惑ばかりかけていましたが、これで恩返しができそうです。」

「そう思ってくれて嬉しいよ。ありがとう。頑張って仕事しようじゃないか。」

「はい。ところで、社長から資料を預かっているのですが、ご覧になりますか。」

「うーん、A国のことだから私に関わるのはあまりよくないのかもしれないが、資料を見るだけならば良いだろう。ちょっと読ませてもらうよ。」

「わかりました。後で取りにきますので、それまで預けておきます。では、失礼します。」

J 弁護士から預かった資料は、S 工業が保有するステルス化技術に関するものであった。形状制御技術と電波吸収体技術をハイブリッドすると共に、特に電波吸収体技術の中では有効性は認識されているものの重量面で採用が難しいとされている磁性電波吸収材料を軽量化することで、高速戦闘機であっても画期的なステルス化がはかれるとのことであった。

「ふーん、すごいもんだな S 工業も。これが実用化され、戦闘機に採用されたら当分の間は世界中、どこでも自由に跳ぶことができるのかもしれないな。まてよ・・・」

.....

「兄貴、電話よこすなんて久しぶりじゃないか。5年ぶりかな。どうだい、元気でやっているかい。」

「ああ、今は A 国で法律事務所を経営しているよ。」

「え、でも兄貴は B 国の弁護士だよな。A 国の弁護士じゃないだろ。どうして経営できるんだい。A 国でも弁護士の資格をとったのかい。」

「それは無理だよ、いまさら試験に受かるわけ無いじゃないか。でもね、A 国では 3 年前に A 国弁護士と外国弁護士とが共同して弁護士の法人を設立することができるようになったんだ。そして、その法人だと、A 国の国内法と外国弁護士の本国法の両方の法律案件を扱えることができるようになるんだ。」

「ということは、誰か A 国の弁護士を見つけたのか。」

「ああ、どうやら弁護士も就職難らしく求人会社に依頼したら直ぐに見つけてきたよ。J 君とって経験値はまだまだだが、なかなか気立ての良い男だ。」

「だったら、仕事は超順調じゃないか。二つの国の法律の仕事ができるなんて、依頼が殺到して嬉しい悲鳴をあげているんじゃないのか。」

「それが、そうともいなくてね。私の方は B 国企業の手伝い仕事があるから良いんだけど、J 君は若くて経験が浅いから。高収入や安定収入が見込める仕事がほとんどないんだよ。最近では専ら過払い金返還請求や債権回収といった仕事ばかりだよ。」

「そっかあ。弁護士っていうのも結構大変なんだな。まあ、嫌になったらいつでも帰ってくればいいさ。兄貴は長男だから、その方が父さんたちも喜ぶし。」

「ところで、電話したのは、J 君の顧問先が保有するステルス化に関する技術が国のプロジェクトで共同開発されることになったことを知らせようと思ってね。技術に疎い私が資料を読んで理解できる範囲なんだが、相当革新的な技術のようで、順調にいけば A 国の次世代戦闘機に採用される可能性が高い大きいみたいだ。そこで、国家保安局にいるお前に一言だけは情報入れておこうかな、と思ったもので。」

「おいおい、それってすごい情報じゃないか。B 国と A 国とが南の海上でニアミスしていることは知っているだろう。A 国が最新のステルス戦闘機を配備してきたら B 国としては堪らないよ。その資料、内緒で送ってくれないか。」

「えっ、流石にそこまでは難しいよ。ばれたら懲戒処

分になるし、法人は解散させられてしまう。一つ間違ったら刑務所行きだし、高額な損害賠償が請求されてしまうよ。」

「兄貴、よく考えてくれよ。兄貴はどこの国の人間だ。このまま放置したら兄貴の故郷はA国の見えない戦闘機に制空権を奪われて危険にさらされてしまうんだぜ。兄貴には愛国心というものが無いのかい。それに、ばれそうになったら、こっちに帰ってくれば大丈夫だから。」

「愛国心か……………。それもそうだな。わかったよ。資料、送るよ。」

「そうこなくっちゃ。ところで、図面、実験データというような詳しい資料は手元にあるのかい。」

「いや、そこまでのものは無い。」

「それも手に入れて、まとめて送ってくれよ。すべては、兄貴の故郷、B国のためなんだから。」

「わかった。できるかぎりのことはするよ。少し時間をくれ。」

……………

「所長、なんでしょうか」

「さっきの資料、一通り読み終わったから取りに来てくれないか。それでなんだが、確かA国が策定した技術流出防止指針によれば、単にマニュアルを作成するだけでは足りず、具体的対策を強化しなければならなかったはず。特に、今回の件は国防が絡んでいるから、秘密管理に際しては対象物をきっちり特定する等の具体的対策が必要になると思うんだ。その点、手元の資料は包括的、部分的だから、それだけを基本に作業をしてもだめかもしれない。おそらく細部仕様や図面、実験データが会社にあるはずだから、それらも含めて総合的、且つ、具体的対策を検討した方が良いと思うんだ。私のほうでもじっくり検討したいから手配してくれ。」

「所長、でもこの案件はA国法の範囲だから私が仕事しないと拙いと思うんですけど。……………でも、私じゃ経験不足ですよ。下手な仕事して失敗したら報酬はパーになっちゃうし。過払い金返還請求の仕事とかも所長に手伝ってもらっているわけだし。」

「了解です。手配しておきます。」

「よろしく頼んだよ。」

……………

「兄貴、今は事務所かい」

「ああ、久しぶりだな。電話してくるのは2年ぶりか。」

「そうかもね。ところで、A国弁護士のJ君だっけ。彼は。」

「隣の部屋にいるよ。」

「そっか、そうそう急いでテレビをつけてみてくれなにか」

「わかった。で、どのチャンネル。まあ、今の時間帯は、どのチャンネルもお昼のワイドショーで似たり寄ったりなんだけど。」

「どこでもいいさ。つければ解る。」

テレビをつけると、すべてのチャンネルが緊急報道番組に変更されていた。

どのアナウンサーも悲痛な面持ちでニュースを読み上げていた。

衛自省によれば、昨夜未明、我国の最新型戦闘機F99が南海沖で消息を絶ったとのこと。原因はわかっておりませんが、B国の戦闘機により撃墜された可能性があるとの情報が一部の関係筋から寄せられています。ただし、別の関係筋によれば、この戦闘機には我国が独自に開発した最新のステルス技術が採用されていたとのことで、B国のレーダー等に検知される可能性は無いとのこと。いずれに

しても、今回の事件により我国の防衛については抜本的な見直しが必要との見解が出ています。衛自大臣は責任をとって辞意を首相に伝えているとのこと。また、野党から内閣不信任案を提出する動きが出てきている様子です。それでは衛自省前から中継です。F 本さん、そちらの状況はいかがですか？・・・

「おい、これって」

「ああ、兄貴の推測どおりだよ。兄貴から貰った資料、図面、データに基づいてこっちでは、そのステルス化を無効にする技術を開発していたのさ。そうとも知らずに堂々と飛んでくるものだから、性能試験を兼ねて少しお灸をすえてやったわけ。それと、こっちでは、その技術をベースにしてもっと優れたステルス化を発明したんだ。だから、こっちの戦闘機は A 国のレーダーでは認識できなくて、A 国戦闘機の情報不明の原因はわからないわけさ。しかも、こっちの発明は三世代先を見据えたものだから、そう簡単には無効にされない。B 国の制空権は安泰。それだけじゃない、当分の間、A 国の上空を自由に飛ぶことができるんだ。今晚あたり、A 国の上空をこっちの戦闘機が飛びまわっているかもしれないぜ。

こうなったのも兄貴の愛国心のおかげさ。こっちの幹部も大喜びしてる。そうそう、父さん達、国のはからいで首都のど真ん中の高級マンションに引っ越したんだ。もちろん、家賃は一生涯、国が全額負担するというので。それ以外にも、国からは毎月高額な報酬も支払われることになっている。父さん達には詳しいことを伝えていないけど、兄貴のおかげということは伝わっている。それと、俺も先月の異動で国家保安局の局長に昇進したよ。その前が課長クラスだったから、三段飛ばし以上の昇進。これも兄貴のおかげさ。

兄貴は最高の孝行息子、俺にとっては自慢の兄貴、B 国にとっては英雄さ。年が明けたら、こっちへ帰っておいでよ。幹部にも紹介したいし。じゃあ、また連絡するから。」

・・・・・・・・

愛国心、孝行息子、自慢の兄貴、英雄・・・・
愛国心、孝行息子、自慢の兄貴、英雄・・・・

私はテレビを見ながら何度も呪文のように唱えていた。

・・・・・・・・

「ああ、ミスター X、今どこだ。兄貴は事務所にいる。多分、テレビを見ているはず。J 弁護士は隣の部屋だ。打合せどおりによろしく頼む。」

「わかりました。」

「くれぐれも、順序を間違えないように。最初が J 弁護士で次が兄貴。債権回収された相手方が逆恨みしたんだから。そうそう、今は昼時だけど事務員がいるはず。それは始末しないように。大事な目撃者なんだから。」

「わかってます。では。」

・・・・・・・・

兄貴、悪く思わないでくれよ。

上からの命令なんだ。

兄貴は知りすぎたって。

だから、こうしなくてはならないんだ。

でもね、兄貴の愛国心、今回のことを知っている人はずっと忘れない。

兄貴は英雄さ。そして、これからは伝説として、B 国で語り継がれるから。

もしかすると、A 国でも J 弁護士を助けようとして命を落とした異国の男として語り継がれるかもしれないよ。

そうそう、兄貴の家族、俺が責任もって一生面倒みるから。

・・・・・・・・

その日の夕方、テレビのニュース番組では法律事務所殺人事件がトップニュースとして取り上げられていた。

「都内の法律事務所殺人事件があったようすです。目撃者によれば、犯人は、この法律事務所の J 弁護士

が担当した債権回収を逆恨みした者とのこと。この事件で、J 弁護士と、J 弁護士を助けようとした B 国の弁護士が殺害されました。犯人は未だ逃走中とのことです。それでは現場から中継です。F 本さん、そちらの状況はいかがですか？……………」

……………」

……遠くの方で声が聞こえる。

「所長、所長」

気がついてみると I 女史が立っていた。

「すまん、すまん、どうやら居眠りをしてしまったようだ」

「すまんじゃないでしょ。かれこれ 2 時間位、寝てましたよ。昨晚、何時まで飲み歩いてたんですか。言いたくないんですけど、数年前から特許出願等の依頼件数が低迷しているのはわかっていますよね。特に、今月は売上がぜんぜん駄目。飲み歩いたり居眠りしてる暇があったら、明細書の一つも仕上げてくださいよ。エナジードリンクと胃腸薬、ここにおいておきま

すから。」

「わかった、わかった。わかったからガミガミ言わないでくれよ。ただでさえ二日酔いで頭が痛いんだから。」

「はいはい、それと、さっき Y 代議士の秘書の方から電話があって、伝言頼まれました。電話取次ぎましようか、って言ったんですけど伝言にして欲しいって。伝言内容は〔B 法人の件、Y 代議士が知財業務削除の修正動議をかけて頑張った結果、うまくいった。〕ですって。B 法人だか X 法人だか知らないけど、政治ごっこもいい加減にしてくださいよ、所長。」

胃腸薬をエナジードリンクで一気に流し込んだ私は、パソコンに向かって明細書を書き始めた。ひどかった頭痛は、いつのまにか解消していた。

了

この物語はフィクションです。実際の個人・団体・事件等とは一切関係ありません。